

2026 年度学会賞受賞者について

2026 年度の学会賞受賞者が決定いたしました。おめでとうございます。授賞式ならびに功績賞学術賞の受賞講演は、第 34 回環境化学討論会（第 5 回環境化学物質合同大会）の 2 日目に下記の通り開催いたします。

日時：2026 年 6 月 24 日（水）13:00～16:30（学会賞授賞式に続き受賞講演がございます。）

会場：出島メッセ長崎 101 会議室（A 会場）

| 賞名 | 受賞者名 | | 受賞業績 |
|-----------------|--------|-------------------------|---|
| 第35回環境化学功績賞 | 岩田久人 | 愛媛大学 先端研究院・沿岸環境科学研究センター | 野生動物を対象とした化学物質応答機構の解明による環境毒性学への貢献 |
| | 鈴木規之 | 国立環境研究所 | 化学物質管理の科学的基盤の構築並びに対策への反映 |
| 第35回環境化学学術賞 | 乾 秀之 | 神戸大学 | PCBをはじめとする環境汚染物質の代謝機構解明 |
| | 三宅祐一 | 横浜国立大学 | 包括的な有機ハロゲンの分析技術開発と化学物質管理に関する研究 |
| 第33回環境化学論文賞 | 加藤翔平 | 東京農工大学 | Assessment of trace element contamination derived from coastal plastic debris using gastropods, bivalves, and decapod crustaceans on Zamami-jima Island, the Ryukyu Islands: Spatial, temporal, and species-specific variation (EMCR Vol.5, pp.137-156, 2025) |
| | 藤田喜久 | 沖縄県立芸術大学 | |
| | 水川薫子 | 東京農工大学 | |
| | 高田秀重 | 東京農工大学 | |
| | 野上大介 | 日本エヌ・ユー・エス株式会社 | |
| | 大矢悠幾 | 東京農工大学 | |
| | 大地まどか | 東京農工大学 | |
| | 渡邊 泉 | 東京農工大学 | |
| 第35回環境化学技術賞 | 蓑毛康太郎 | 埼玉県環境科学国際センター | Peak separation of all seventeen 2,3,7,8-substituted polychlorinated dibenzo-p-dioxins and dibenzofurans in a single injection using a narrow-bore extended-length DB-17ms chromatography capillary column (EMCR Vol.5, pp.83-88, 2025) |
| | 大塚宜寿 | 埼玉県環境科学国際センター | |
| | 落合祐介 | 埼玉県環境科学国際センター | |
| | 橋本俊次 | 国立環境研究所 | |
| 第35回環境化学技術賞 | 田代 豊 | 名桜大学 | Discharges of perfluoroalkyl substances into coastal waters and their accumulation in porcupinefish (<i>Diadon holacanthus</i>) in Okinawa, Japan (EMCR Vol.5, pp.170-176, 2025) |
| | 池原宇則 | 沖縄国際大学 | |
| | 伊藤拓馬 | 沖縄国際大学 | |
| | 原田浩二 | 京都府立大学 | |
| 第5回環境化学学生・若手論文賞 | 雑質 力弥 | 東京農工大学 | アルカリ性環境でのCrの挙動に及ぼすV, Mn, AsおよびSbの影響 環境化学 Vol.35, pp.24-33, 2025 |
| | 林 佳奈 | 東京農工大学 | |
| | 大矢 悠幾 | 東京農工大学 | |
| | 尾崎 宏和 | 東京農工大学 | |
| | 大地 まどか | 東京農工大学 | |
| | 渡邊 泉 | 東京農工大学 | |
| 第35回環境化学有功賞 | 佐藤克久 | 西川計測株式会社 | 学会活動への多大なる貢献 |

13:00～13:40 合同授賞式(日本環境化学会、日本環境毒性学会)

13:40～15:00 日本環境毒性学会受賞講演

15:10～ 日本環境化学会 第35回環境化学功績賞 受賞講演

岩田久人 氏(愛媛大学先端研究院・沿岸環境科学研究センター)

「環境化学と環境毒性学をつなぐ:野生動物の化学物質影響評価に向けた研究の歩み」

本講演では、私のこれまでの研究の歩みを振り返る。地球規模に分布する環境汚染物質の動態解明を出発点として、野生動物における化学物質の生体応答、感受性差、毒性発現機序の解明へと展開してきた研究の流れを紹介する。シトクロム P450 や核内受容体を指標とした解析、多元的オミクス解析、さらに近年進めてきた *in vitro*・*in silico*・機械学習を統合した New Approach Methodologies (NAMs) への展開にも触れる。あわせて、環境化学と環境毒性学をつなぐ研究の意義と、野生動物の化学物質リスク評価の今後の展望についても述べたい。



15:30～ 日本環境化学会 第35回環境化学功績賞 受賞講演

鈴木規之 氏(国立研究開発法人 国立環境研究所)

「科学と化学物質管理:科学政策パネル ISP-CWP と今後の環境科学」

2025 年、国連において「化学物質、廃棄物及び汚染に関する政府間科学・政策パネル(ISP-CWP: Intergovernmental Science-policy Panel on Chemicals, Waste and Pollution)」が設立された。公害問題への取り組みに始まる環境化学・環境毒性学の分野では国内外で多くの科学と政策の活動がすでに存在するが、本パネルは広範な分野を前提とし、科学的独立性を明確にうたうまったく初めての枠組みであり、今後の環境化学・環境毒性学の学術と政策の新たな係わりを生むと考える。本パネルの構想から設立に至る経緯や活動について紹介する。



15:50～ 日本環境化学会 第35回環境化学学術賞 受賞講演

乾 秀之 氏(神戸大学)

「PCB をはじめとする環境汚染物質の代謝機構解明」

人為起源の化学物質による環境汚染は深刻で、ヒトや野生動物の健康に悪影響を及ぼします。シトクロム P450 モノオキシゲナーゼは、動物における化学物質の初期代謝に関与し、毒性発現を左右することが知られています。しかし、塩素の数や位置が異なる多数の異性体を持つ PCB やポリ塩化ナフタレン、塩素化パラフィンの代謝機構の解明は不十分でした。このような化合物が P450 により水酸化や脱塩素化を介して代謝・解毒される分子メカニズムについて紹介します。



16:10～ 日本環境化学会 第35回環境化学学術賞 受賞講演

三宅祐一 氏(横浜国立大学)

「包括的な有機ハロゲンの分析技術開発と化学物質管理に関する研究」

残留性有機汚染物質を中心に環境汚染調査、環境動態解析、曝露・リスク評価などの研究を行ってきました。特に、燃焼イオンクロマト法の装置化における初期段階から携わり、有機ハロゲン(フッ素・塩素・臭素・ヨウ素)総量の分析技術を高感度化することで、従来法では捉えきれない未知化合物を含めた定量・評価手法を確立してきました。ダイオキシン類、臭素系難燃剤、PFAS などへ適用してきた研究成果の一部を紹介します。

